

番号	111	千栗土居 ちりく		
所在地		みやき町 白壁		
災害別		水 害		
目的別	遺 構	建立年	元和年間（1615～1624）？	
特記事項				



たび重なる筑後川の水害から佐賀藩領を守るために、成富兵庫茂安（1560～1634）によって築造された堤防。当時は旧北茂安町の千栗から旧三根町の坂口まで東西12キロにわたる堤防であったが、現在はその一部（約200m）が千栗土居公園として残され、平成12年4月に佐賀県史跡に指定されている。近隣には、茂安公を祀る神社や碑が建っている。

公園に建てられた説明版には、「この土居は「千栗土居」と呼ばれ、江戸時代より、筑後川の度重なる洪水からこの地域の水田や民衆を守ってきました。

みやき町北茂安地区の由来ともなっている佐賀鍋島藩家臣「成富兵庫茂安」公。彼は卓越した技術を駆使し、佐賀藩内の治水・利水事業を完成へ導きましたが、この「千栗土居」も彼が手掛けた事業の一つです。彼の数多い事績の中でも、「石井樋（佐賀市）」「市ノ江水路（佐賀市）」「蛤水道（吉野ヶ里町）」などに肩を並べる大工事といわれています。

「千栗土居」は、延長約三里（十二km）を十二年の歳月をかけて築造されたと伝えられています。その規模は、「根回り三十間（約五十五m）二上四間（七・三m）ノ土居」（『佐賀県近世資料』第一編第二巻）とされ、その大きさがうかがえます。また様々な工夫が施されており、土居の基礎部分には「ハガネ」と呼ばれる粘土帯を入れて補強したといわれています。また土居の川側斜面には根が張る笹を植え、川が増水しても土が削られにくく

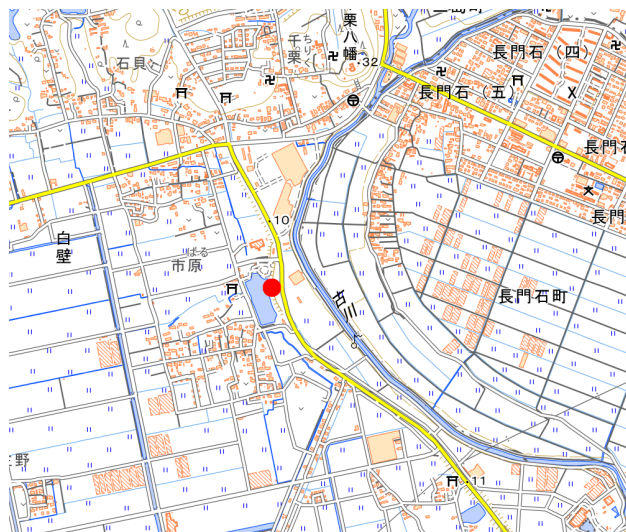
しています。さらの外側斜面には杉が植林され、万が一、土居が決壊した時の緊急資材としたといわれています。地元の方々は、通称「スギデイ（杉土居）」と呼び親しんでいたようですが、これは杉並木の風情から名付けられたものでしょう。

「千栗土居」の築造年代は、大工事だった割に正確には伝わっていません。茂安公の没年から元和年間（1615～1623）ではないかと推定されています。その後、大正十三年（1924）の若槻内務大臣が発した治水対策に端を発し、昭和三十年代までに、新しい筑後川堤防が完成したことで、三百年以上続いてきた「千栗土居」の役目は終わり、昭和四十五年（1970）までには、千栗土居の廃堤工事が終了しました。現在、「千栗土居」は、この公園部分しか残っておりません。しかしこの部分は、発掘調査の結果、粘土を版築状に固めて補強を図っていることや、土居の内外の犬走り（河川敷）部分を良好に残していることが分かっています。

土居の上に立ち、古川（旧筑後川）を挟んで、久留米市長門石町側の堤防との距離を見てみると、そこに昔の筑後川が流れていた様子を思い浮かべることができます。この地域の人々は、「千栗土居」の恩恵を忘れることなく、現在に至っているのです。」と記されている。



みやき町白石神社 成富茂安公合祀記念碑



国土地理院電子国土 Web



みやき町西島 茂安公築堤功績碑